

「見えて来た新しい聖書翻訳—パイロット版を手がかりに」 住谷 眞

初めに

松尾芭蕉は『奥の細道』で金沢に入ったことを、「卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也」と記している。これは1689年の7月15日のことである。芭蕉と同じ日に初めて金澤に来たことに感慨を覚える。尤も、芭蕉が来た7月15日は、旧暦で今よりひと月ほど遅いので金澤で芭蕉は、塚も動け我泣声は秋の風という俳句を詠んでいる。

芭蕉は金澤から小松を経て山中温泉に行っている。私は行ったことがないので、本聖書翻訳の仕事が終わったら骨休めに是非訪ねたいと思っているが、それはともかく、山中節の何番も続く歌詞に皆さまもご存知のように「ア一山が高うて山中見えぬ山中恋しや山憎や」とある。

私も2010年の夏より本聖書翻訳事業に参加した当初、聖書の翻訳という作業が大きな越えがたい山のように感じたが、6年経過して、一山超えて目指すゴールが見えて来た思いである。

かぎりある命とときを惜しみつつけふも机にみふみを訳す

この6年間、まさに時間とエネルギーを注いで聖書のギリシア語の日本語への翻訳に取り組んできて、今はこの事業を自分にとってライフワークのように感じ、参加させていただいたことを感謝している。またこの事業がなければけっして出会うことのなかった多くの人々との親交が与えられたこともかけがえのない財産となった。

昨年の12月からは新翻訳事業パイロット版も順次刊行され、2016年現在で、ヨハネの黙示録(2015年12月)、ヤコブの手紙(同)、テサロニケの信徒への手紙一(同)、テサロニケの信徒への手紙二(2016年2月)エフェソの信徒への手紙・フィリピの信徒への手紙(同)、ローマの信徒への手紙(2016年4月)、ヨハネによる福音書(同)、ガラテヤの信徒への手紙(2016年5月)、コロサイの信徒への手紙(同)、テモテへの手紙一、二・テトス・フィレモンへの手紙(2016年6月)、ペトロの手紙一、二・ヨハネの手紙一、二、三・ユダの手紙(同)と、新約聖書については全部で20の書が刊行された。

新約聖書は全部で27巻あるので、全体のおよそ四分之三、75パーセント近くがほぼ完成し、新しい翻訳聖書の姿が見えて来た。今回のわたくしのセミナーでは、この翻訳がほぼ確定しているパイロット版を手がかりにして、これまでの口語訳、新改訳、新共同訳と、具体的に異なった新機軸が打ち出されている重要と思われる箇所を、時間の関係ですべての書について網羅することはできないけれども、いくつかの箇所を具体的に取り上げて新しい翻訳聖書について紹介していきたい。順番は、新約聖書に収められた順番に従って見ることにする。なお、比較としては従来の訳を適宜引用する。

1 ヨハネによる福音書

1) 1:3-4 「すべてのものは言によって生じた。言によらずに生じたものは何一つなかった。言のうちに生じたものは命であった。」

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。(新共同訳)

3 節終わりの「生じたもの」を新翻訳では、従来 3 節の文につなげて訳していたが、ネストレ・アーラント 28 版の本文に従い、4 節につなげて訳している。その結果、3-4 という節渡しとなった。これがオリジナルな読みであると考えられる。

2) 「自分独りで」5 : 19、30、7 : 17、18、28、8 : 28、42、12 : 49、14 : 10、16 : 13

従来は「自分から」。これだと自発性の意味にも取れる。そうではなく、「父と共に」という意味を明確にするため、敢えてこの訳が取られた。

3) 13 : 12 「こうしてイエスは弟子たちの足を洗うと、上着を着て、再び横になって言われた。」

口語訳 「こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた。」

新共同訳「さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。

新改訳 「イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。」

小さなことだが、当時の食事は、横臥してとった。「席」と訳すとテーブルの椅子に着くような現代的なイメージになる。原語のギリシア語（アナピプター）は「横たわる」という意味である（例 ユディト記 12 : 16）。

4) 21 : 17 『三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしがいとおいしいか。」ペトロは、イエスが三度目に「わたしがいとおいしいか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたをいとおしんでいることを、あなたは知っておられます。』』

イエスは一回目、二回目 「わたしを愛するか」と問う。この愛するは「アガパオー」という言葉である。これに対しペトロは二回とも「フィレオー」という言葉で応える。アガパオーという言葉は、知的、意志的な愛を意味する。これに対し、フィレオーは情緒的な愛を意味する。大好きという感じである。ペトロは、この言葉で二回、応答しているのに、

三回目にその言葉を用いてイエスが問い返してきたことに、悲しくなったのであって、「三回も」問われたことに心を痛めたのではない。実際、原語は「三度も」ではなく「三度目」が正しい（21 : 14 と同じ言葉）。

従来の訳は、アガパオーとフィレオーに訳語の区別をしていないが、本訳ではフィレオーを「いとおしむ」と訳してアガパオー（愛する）と区別を始めて試みた（5 : 20、11 : 3、11 : 36、12 : 25、15 : 19、16 : 27、20 : 2、21 : 15、16、17）。

2 「イエス・キリストの信実」

近年の新約学では、パウロ神学における神の義の生じる实在根拠として解される「の」の属格を、

従来のように対格的（対格的属格）にとり「イエス・キリストへの信仰」として理解するのではなく、主格的に取り「イエス・キリストが貫いた信実」と理解することが通説となってきた。その新しい知見を取り入れた訳になっている。ちなみに従来理解は、別訳として欄外に入れられている。

「信仰」と訳される言葉は、ギリシア語でピスティスであるが、これは「信仰」「信実」「誠実」「忠実」とも訳される。さすがに、「イエス・キリストの信仰」とまでは訳せないので、「信実」と訳されている。「信実」は「真実」と同音異義語で紛らわしいが、辞書にある言葉である。

このような新機軸は、宗教改革の「信仰義認」の立場から見ると、異議が出る可能性があるが、それは、この箇所解釈史の問題であって、当該箇所の正しい理解であるかということとは別の事柄である。また、ローマの信徒への手紙 3 章 22 節を見ると、「信じる者」にこの神の義が及ぶとあるので、「信仰義認」が否定されるわけではない。人間のイエス・キリストへの信仰は義の受容器官であるので、ここでそのことを認めることができる。

このような主格的属格に立った訳は、23 節「その信実」にも打ち出され、欄外に「信仰」という別訳が置かれている。また 26、27、28 節では、本文に「信仰」、別訳が「信実」となっている。これは、どこまでが、「イエス・キリストの信実」であり、どこまでが「イエス・キリストへの信仰」なのか、まだ学者の間で意見が分かれており、またパウロ自体も曖昧かつ流動的である（実際、30 節以降は明らかに人間の側の「信仰」となる）ともあって、本訳では、主格的属格の訳としての採用については、慎重で限定的であることを示している。

1) 3 : 22 「それは、イエス・キリストの信実によって生じる神の義であって、信じる者すべてに及ぶものです。そこに差別はありません。」

同じ理解に立ったパウロ書簡の他の箇所

* ガラテヤの信徒への手紙

3 : 16 「しかし、わたしたちは人が律法の行いによるのではなく、イエス・キリストの信実によるのでなければ義とされないと知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのです。それは律法の行いではなく、キリストの信実によって義とされるためです。なぜなら律法の行いによっては誰一人として義とされないからです。」別訳が「の信仰」「への信仰」「信仰」となっている。また 2 : 15-21 節の見出しも「キリストの信実によって義とされる」となっている。

3 : 20 「もはやわたしが生きているのではなく、キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今肉体において生きているこの命は、わたしを愛し、わたしのためにご自身を差し出された神の子の信実によるものです。」別訳が「神の子の信仰」「神の子への信仰」となっている。

3 : 22-26 「しかし聖書は、すべてのものを罪のもとに閉じ込めました。それは、約束がイエス・キリストの信実によって、信じる人々に与えられるためです。23 信実が現れる前は、わたしたちは律法の監督下に置かれ、来るべき信実が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。24 こうし

て律法は、わたしたちをキリストに導く養育係となりました。それは、わたしたちが信実によって義とされるためです。25 しかし信実が現れたので、わたしたちはもはや養育係の下にはいないのです。26 なぜなら、あなたがたは皆、信実によってキリスト・イエスにあって神の子だからです。」別訳「信仰」となっている。

* フィリピの信徒への手紙

3:9 「キリストの内に見いだされるためです。そのとき、わたしが持つのは、律法によるわたし自身の義ではなく、キリストの信実による義、その信実に基づく神からの義なのです。」別訳が「キリストの信仰」「キリストへの信仰」「信仰」となっている。

そこでは3:1-9節の見出しも「キリストの信実による義」となっている。

同じ理解に立った第二パウロ書簡の他の箇所

* エフェソの信徒への手紙

3:13 「キリストにおいて、わたしたちは、キリストの信実により大胆に、確信をもって神に近づくことができます。」別訳「の信仰」「への信仰」となっている。

3 ローマの信徒への手紙

9:5b 「キリストは万物の上におられる方。神は永遠にほめたたえられる方、アーメン」

ここは、新約聖書における、またローマ書における解釈の難所として知られる箇所である。

口語訳 「万物の上にあります神は、永遠にほむべきかな、アアメン。」

新改訳「このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」

新共同訳「キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。」

上のように、三つの訳すべてが異なっている。ここの解釈について詳しく立ち入る余裕はないが、パウロの真正書簡において、パウロがキリストを「神」と言う箇所はどこにもないので、新改訳、新共同訳のように理解することはできない。口語訳は、文法的にそのように訳すことはできない。本文に採用された訳が文法的にも、意味としても正しい。この場合、「神」は「父なる神」となる。

4 ガラテヤの信徒への手紙

2:10 「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことをこれからも顧みるようにとのことでしたが、わたしはまさにこのことのためにも大いに努めてきたのです。」

口語訳 「ただ一つ、わたしたちが貧しい人々をかえりみるようにとのことであつたが、わたしはもとより、この事のためにも大いに努めてきたのである。」

新共同訳 「ただ、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが、これは、

ちょうどわたしも心がけてきた点です。」

新改訳 「ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところです。」

ギリシア語原文に「も」を表す言葉（カイ）がついている。それを、新共同訳、新改訳は「わたし」に結びつけて「わたしも」と訳している。これに対して口語訳は「このこと」に結びつけて訳している。

ここは、パウロが使徒会議の決定に従い、異邦人伝道と並んでエルサレム教会の「貧しい人たち」を「これからも顧みる」ための献金を集める課題をはたしてきたこと言っているのだから、口語訳が基本的に正しい。しかし、口語訳は、その募金活動が今後なされる今後の課題のように訳している。しかし、原文は、これからも続けるようにということで、エルサレム会議と同時にエルサレムへの飢饉に伴う緊急支援がなされたことを今回だけのことにしないように続けてほしいという決定であったことがわかる。この点は、使徒言行録 11：30 に記された飢饉におけるエルサレム支援訪問が、15 章のエルサレム会議と実は同時に行われたことを示しているのである。

2：10 はもう一つ重要なことをわれわれに教えてくれる。その手掛かりは人称の変化である。すなわち「わたしたちは」から「わたし」に変わっている。前者の「わたしたち」にはエルサレム教会から使徒会議（と飢饉に伴う援助訪問）のためエルサレムに行ったパウロとバルナバらがアンテオケ教会に人たちが含意されている。これに対し、後者では「パウロ」だけが「わたし」として語られる。このことは、この手紙を書いた時点で、パウロはバルナバやアンテオケ教会から別れ単独になったことがわかるのである。周知のようにパウロは第二回伝道旅行の出発に当たってバルナバとアンテオケ教会から袂をわかった。

それゆえ、この短い文から、ガラテヤ書は少なくとも、第二回伝道旅行以後に書かれた書物であることがわかるのである。

このように、本節は、短い文を丁寧に観察し、正しく読み解くことの大切さをあらためて知らされる好個の箇所であり、今回の翻訳ではその細かい洞察が正しく訳出されている。

5 テサロニケの信徒への手紙一

2：6-8 「6 また、あなたがたであれ、他の人であれ、人からの称賛を求めませんでした。 7 わたしたちはキリストの使徒として重んじられることができたのです。それにもかかわらず、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親が子どもを慈しみ育てるように、 8 わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音だけでなく、自分の命さえも喜んで与えたいと願っていました。あなたがたがわたしたちの愛する者となったからです。」

口語訳 2:6 また、わたしたちは、キリストの使徒として重んじられることができたのであるが、あ

あなたがたからもせよ、ほかの人々からもせよ、人間からの榮譽を求めるとはしなかった。2:7 むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった。 2:8 このように、あなたがたを慕わしく思っていたので、ただ神の福音ばかりではなく、自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願ったほどに、あなたがたを愛したのである

新共同訳 2:6 また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の譽れを求めませんでした。2:7 わたしたちは、キリストの使徒として權威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で**幼子**のようになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、 2:8 わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。

新改訳 2:6 また、キリストの使徒たちとして權威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名譽を受けようとはしませんでした。2:7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。 2:8 このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。

ここで「優しく」「幼子」と訳されているギリシア語は、それぞれ「エーピオス」「ネーピオス」でギリシア文字ニュー—文字が単語の前にあるか否かの違いである。ネストレ・アーラント 28 版は、後者を採用する。「優しく」を採用する場合には、「ちょうど母親がその子供を大事に育てるように」という節を、7 節にかかるものとして読む。口語訳、新改訳がそのような訳をとっている。これに対し、「幼子」という本文をとる場合には、この節は、8 節にかかるものとして読むことになり、新共同訳がそのように訳している。

この箇所は、よく観察すると、パウロが、テサロニケの教会の信徒に対して、權威を主張することができたのに、「幼子」になったことがまず言われ、つぎに「母親」、11 節で「父親」になったと言われる。「幼子のような小ささ（マタイ 18 : 3—4 参照）、「母親」の自己犠牲的ないつくしみ。訓戒をする「父親」というこの順番の妙をパウロはここで述べているのである。それゆえ、新共同訳の読み方が文脈的にも正しい。ちなみに新翻訳では、欄外註に「異」「優しく振る舞った」というエーピオスを取る、口語訳、新改訳の読み方を記している。

6 ヤコブの手紙

1) 2 : 14…18 『わたしのきょうだいたちよ、「わたしには信仰がある」と言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。…

18 逆に、こう言う者もいるでしょう。「あなたには信仰があり、わたしには行いがある。行いのないあなたの信仰を、わたしに見せてください。そうすれば、わたしもまた、行いによってわたしの信仰

をあなたに見せましょう。」

口語訳 2:14 『たしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。…

2:18 しかし、「ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある」と言う者があるろう。それなら、行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう。』

新共同訳 2:14 『わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。…

2:18 しかし、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」と言う人がいるかもしれません。行いの伴わないあなたの信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう。』

新改訳 2:14 『私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。…

2:18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」

2:14-18 は、著者の議論の筋がたどりにくく、また会話文と地の文との区別も難しい箇所である。18 節は「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」というのが原文の正しい訳であるが、口語訳はここをごまかして訳している。それは、「あなた」と「わたし」が文脈においてだれを指しているのかを理解することができなかつたためである。

18 節は、全体として 14 節で「わたしには信仰がある」と言いながら、行いが伴わない人に対して、別な人が、「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」と反論しているのであり、その会話は 18 節の終わりまでと理解するのが妥当である。新共同訳は、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」までを会話、その後の部分を地の文として著者の主張として翻訳してしまって、意味が通らなくなっている。その点では、新改訳が正しい翻訳をしているが、18 節が 14 節の反論として語られているということが、明確ではない。そこで新訳は、「逆に」という言葉を入れて、これが反論であることがはっきりわかるように工夫して訳出した。

2) 3:6 「舌もまた火です。舌は、わたしたちの体の器官の中で、不義の世界となっています。」

口語訳 「舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、」

新共同訳 『舌は火です。舌は「不義の世界」です。わたしたちの体の器官の一つで、』

新改訳 「舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、」

従来の訳はいずれも、「不義の世界」を、「舌は火である」の「火」に続く、述語として訳してきた。しかし、これは、原文の「なっている」と訳した動詞（カシスタタイ）の目的補語として理解するのが相当である。このどちらかなのかをめぐって、ここは解釈の難所となってきたが、今回は新約学の新しい知見によって、後者の意味にとるのが妥当として本文に訳出し、従来の訳は別訳として欄外においた。

因みに、新約聖書学の最新に成果を取り入れて共同書簡において新たな本文の改訂が行われたネストレ・アーラント 28 版において、この箇所も後者の意味に本文が変わった。それは、27 版まで、「火」と「不義の世界」という言葉の間に、コロン（・）が置かれていたが、今回はピリオド（.）になったということである。小さな記号の変化であるが、大きな変化である。

3) 4 : 5-6 「それともあなたがたは、聖書がむなしい言葉を語っていると思うのですか。わたしたちの内に宿った霊が、妬みに燃えるのです。6 しかし神は、それにまさる恵みを与えてくださいます。そこで聖書はこう語るのです。「神は、高ぶる者を退け へりくだる者に恵みをお与えになる。」」

本箇所は、5 節前半で言われる聖書の引用がどれなのか。5 節後半の本文とその意味が文法的に幾通りにも取れることなど、新約聖書で最も解釈の難しいいわゆる解釈の何所として有名な部分である。以下に、これまでの訳を掲げてみよう。

口語訳 『それとも、「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる」と聖書に書いてあるのは、むなしい言葉だと思うのか。6 しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。』

新共同訳 『それとも、聖書に次のように書かれているのは意味がないと思うのですか。「神はわたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに深く愛しておられ、6 もっと豊かな恵みをくださる。」それで、こう書かれています。「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる。」』

新改訳 『それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」』

上を見ればわかるように、口語訳と新改訳は、聖書の引用は同じに理解している。新共同訳は、さらに新共同訳は、6 節前半まで聖書の引用としている。しかし、これらの聖書の引用箇所は聖書に具体的にはどこにもないのである。そこで、断片のつなぎ合わせか、聖書外の何かからの引用かということになる。

しかし、この聖書の引用は、6 節 b の「神は、高ぶる者を退け へりくだる者に恵みをお与えになる」という箴言 3 : 34 なのである。

また従来、聖書の引用とされてきた(が引用箇所不明の)「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」は、引用ではなく、地の文であり、しかも異読により、「わたしたちの内に宿った霊が、妬みに燃えるのです。」と読むことができ、これが全体の文脈に適うのである。なぜなら、手紙の著者は、4章1節で「あなたがたの間にある戦いはどこから、争いはどこから来るのですか。あなたがたの体の中で争い合う欲望から来るのではありませんか。」と言って、人間の戦い、争いといった悪がどこから来るのかという問題を提起し、それは、わたしたちに宿った霊が妬みに燃えることから来るのであるという人間学的な答えを5節bで与え、しかしそれを解決する神学的な答えを6節で提出し、その根拠として箴言3:34を引いているからである。またこの読み方は、本箇所の文脈と合致するだけでなく、ヤコブの手紙の全体的な神学思想とも合致する(1:13-15を参照)。新翻訳は、この難解な箇所に新しい読み方を提示することによって、本箇所の解釈史において画期的なものとなっている。そこで5節bの従来の訳は、欄外に置かれることになった。

7 ヨハネの黙示録

1) 1:15 「足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のようであり」

口語訳 「その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり」

新共同訳 「足は、炉で精錬されたしんちゅうのように輝き」

新改訳 「その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり」

下線部を引いた部分は、原文では、一つの単語(カルコリバノー)、しかも、それは全ギリシア語でここ(2:18に繰り返される)しか発見されていない単語である。しかもこの文は壊れており、新約聖書における解釈の難所中の難所である。そこで異読によって、文を修復して、翻訳した。ところで、従来の訳は「しんちゅう」と訳しているが、これは青銅でなければならない。カルコリバノーの「カルコ」は銅を意味している。しんちゅう(黄銅)は、銅と亜鉛の合金である。これに対し、青銅は銅と錫の合金であって、人類が鉄を溶融できるようになるまで、人類は何千年もの間、青銅器文明であった。新約時代も青銅器文明に属するのである。従って、金属学、冶金学的にも青銅が正しい(別訳として欄外に「しんちゅう」と置いた)。

2) 5:6 「さらにわたしは、玉座およびそれを囲む四つの生き物と、長老たちとの間に、小羊が屠られたような姿で立っているのを見た。」

口語訳 「わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。」

新共同訳 「わたしはまた、玉座と四つの生き物の間、長老たちの間に、屠られたような小羊が立っているのを見た。」

新改訳 「さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふ

られたと見える小羊が立っているのを見た。

原文では「間」という言葉（エン・メソー）が二度繰り返される。それで、口語訳、新共同訳は、それをそのまま訳している。これでは、小羊がどこに立っているのかがはっきりしなくなる。実は、黙示録の著者は、セム語（ヘブライ語）の影響の強いギリシア語を使う人であることがわかっている。ヘブライ語では「間」という前置詞（ベイン）を二度繰り返して表す（例 創世記 16 : 14）。つまり、「ベイン A ベイン B」で「A と B の間」となる。口語訳、新共同訳は、その言語学的認識がないため、「間」を二回、そのまま訳してしまったのである。そこで、小羊は、玉座と四つの生き物、それと長老たちの間に立っていることになる。新改訳が、正しく訳している。今回の聖書翻訳では、口語訳、新共同訳に対して、正確な訳になった。

終りに

この講演を金沢のことから始めた。最後にまた金沢の話でこれを閉じたい。昨日、私は犀川の畔にある旅館に泊まった。宿辺から見る犀川は、雨で水嵩が増し濁流が激しく流れていた。今日は、この研修会場に来る道すがら、金沢市を流れるもう一つの川である浅野川に沿ってこの研修会場の丘に上がってきた。こちらは犀川とは対照的に、水面が陽にきらめき、穏やかな清流であった。来るとき乗ったタクシーの運転手に、その二つの川の印象を話すと、土地の人は、犀川は男川、浅野川は女川と呼んでいるとのこと。

多くの人たちと共同で、真剣に神の言葉である聖書の翻訳に当たるのであるから、当然、意見の相違や烈しい議論も起こることもある。この二つの美しい川は、ときに犀川のように「ますらをぶり」に、ときに浅野川のように「たをやめぶり」であることを私にあらためて教えてくれたように思う。